

○高円寺の飲み屋街（夜）

T・「1989年・東京 高円寺」

賑わう飲み屋街。酔客やどの店にしようかと物色する連中で溢れている。

三島輝子（29）、苦学生のような地味な服装で、うつむきがちに歩いている。

輝子、腕の中に一本のアコースティックギター。大事そうに抱えている。

輝子、酔客の合間をするすると歩いていく。歩きながら視線は店の中へチラチラ。

【輝子は、生まれ故郷の富山から上京して10年。元々は、東京の短大を出て、卒業して地元に戻る約束を両親としていた。それまで富山から一歩も出たことのなかった輝子は、一日でも早く卒業して地元に戻りたいと思っていた。しかし、東京で暮らしていた町・吉祥寺には、ライブハウスや路上にも音楽が溢れ、音楽の魅力に取りつかれた輝子は、歌手の夢を見るように。

誰も、（それは本人も含め）輝子が歌の才能を持っていることに気づいていない。卒業間近、両親と帰郷でもめる中、両親が交通事故で他界。輝子は、東京に残り、パン屋で働きながらシンガーソングライターとしてデビューするために活動をはじめ。時はバブル全盛期。オーディションに行っても、地味な見た目と生来の緊張しいのせいで、全くその才能を披露できずに落選の日々。あるオーディションで、ディレクターから、度胸をつけるために流しをしてみろと言われ、やり始めてまだ半月の頃の話である。】

高円寺の飲み屋は、どの店も客でこった返している。季節は夏。どの店も入口のドアを開けている。

輝子、居酒屋からスナックやパブが並ぶ細い路地に入っていく。

カウンター席だけの店【ひかり】。カウンターの奥に二人の客。

輝子、立ち止まる。

○スナック「ひかり」の店内

輝子、入ってくる。

カウンターの中にいる「ひかり」の店主・大鳥礼子（32）、笑顔で入口を見る。

礼子「いらっしやい」

礼子、輝子だと気づき、がっかり。

礼子「なんだ。あんたかい」

輝子「あの…歌、いかがですか？」

カウンター席に座る石神功史朗（41）と水商売風の衣装を着た中田裕子（24）石神と裕子、乳繰り合っており気づかない。二人ともずいぶんと酔っている。

【石神は、家電量販店の激戦区、秋葉原の本店で営業課長を勤めるやり手のサラリーマン。本店であるが故に社長を含めた執行部の目も厳しく、常にストレスを抱えて働いている。妻と二人の息子、母親と都下（立川）に住んでいるが、妻との関係は冷え切っており、妻は息子の教育に執心。石神のこと気にかけるのは実の母だけである。

裕子は、OL。昼間は千葉市の役所勤めである。その給料だけでも食ってはいけるが、勤め先に内緒でホステスとして働いている。実は高校時代に家出をし、歌舞伎

町でホステスとして働いていた。二年前、客との間に子供（後に登場する中田さくら）が生まれ、子供は実家で両親と暮らす姉・宮子に預けている。OLをはじめたのは、酒の呑みすぎで胃をやられ、客の伝手で一年前、役所に就職。しかし物足りなくなり、三カ月前から役所には内緒で夜はホステスとして働きはじめていた】

礼子「コーさん。コーさん」

石神「ん？なんだよ」

礼子「流しだって。追っ払おっか？」

石神「ん？いいよ。やれやれ」

輝子「あ、ありがとうございます」

裕子、気のない顔で輝子を見る。

輝子、ギターを抱えて歌い出す。場末のスナックに不釣り合いな透き通るような声。だが、とても小さな声。よく聞こえない。

○飲み屋街の通り（夜）

輝子、石神に髪の毛を掴まれて引きずりまわされている。

石神「しけた歌、歌ってんじゃねえよ」

輝子「ごめんなさい。ごめんなさい」

石神、輝子を蹴飛ばす。輝子、地面に倒れ込む。

石神、執拗にギターを踏みつける。輝子、ギターを守ろうとするが、輝子を蹴り飛ばし、ギターを踏み続ける。

輝子「やめて。やめて」

【石神は、ノルマに追われる会社でのストレス、寝室では口も利かない妻、露骨に反抗的な息子たちへのいら立ちを、すべて右足にため込み、ギターを蹴りつつける。バラバラになっていくギター。】

石神「チッ。行くぞ」

石神、裕子の肩を抱いて歩いていく。

石神「オラ。どけっ」

石神、通行人を威嚇しながら去っていく。

輝子、倒れ込んだまま動かない。輝子、泣いている。

【ギターは、事故で亡くなった父が、母に隠れて仕送りしてくれたお金で買った。帰郷を強く望んだのは母親だった。輝子の父親は、娘がひそかに歌手となる夢を応援しており、母親が習い事ではない時間、電話で輝子の歌を聞かせてもらったりしていた。事故で両親が亡くなったのは輝子のせいではないが、ずっと自己嫌悪に苦しめられており、バラバラになったギターは、二度、父親を殺してしまったような気持ちにさせた。】

通行人たち、輝子をよけながら歩いていき、誰も助けようとしなない。

礼子「もう、ウチに来んじやないよ」

礼子、そういうと店に引っ込んでいく。

○公園の階段の上（夜）

乳繰り合う石神と裕子。

裕子「あぶないってば」

石神「大丈夫、大丈夫だから」

石神が裕子の上に覆いかぶさろうとする。

ドン、と押される二人。石神と裕子、階段を転がりおちていく。

階段の上にいる輝子。二人を押ししたのは輝子である。

階下で血まみれになる二人を見て、茫然としている輝子。

○裁判所・全景

【勝訴】の紙を広げる若い男。沿道の人達から歓声が沸く。

裁判官の声「被告人を死刑に処する」

○同・法廷内

輝子、被告席でうつむく。

○拘置所・全景

○同・面会室

輝子の向かいに座る飯塚章（41）

【飯塚は牧師。10年前から、牧師のボランテニアをはじめた。牧師の家系ではないが、中学時代にフランシスコザビエルの伝記を読み、長崎で信教のために殉職をする信徒たちがいたことを知り、高校時代には、隠れキリシタンの暮らす離島へ一人旅をするほど興味を持つことに。命をかけて神を信じる理由が知りたかった。両親からは大学教師（研究者）になることも提案されるが、牧師になることを選び、夢を叶える。命をとってまで神を信じた信徒たちの領域まで、自分は達していないとことあるごとに感じる日々を過ごしている。家族は妻と娘（後に登場する恭子（妻）と凜（娘））

飯塚、テーブルの上で読んでいた聖書を閉じる。

飯塚「それでは、最後に讃美歌をうたいましょうか」

輝子、飯塚の向かいでほほ笑む。

飯塚「今日も、歌われませんか？」

輝子「ええ」

飯塚「いつか、輝子さんの歌声、聞いてみたいもんですなあ」

輝子、照れたようにうつむく。

飯塚「それでは、わたくし一人で歌わせていただきます」

飯塚、ラジカセを取り出し、再生ボタンを押す。讃美歌のイントロが流れだす。

輝子、静かに聞いている。

○拘置所の外にある公園

飯塚、歩いている。

家族連れが芝生でピクニックをしている。飯塚、その光景を見て微笑む。

○公園・森の中

森の中にくる。鳥たちの囀り。

飯塚、傍にあるベンチに座る。鞆からラジカセを取り出すと、讚美歌のカセットテープを取り出す。そして鞆から、新品のカセットテープを取り出し、袋を開けると袋を丁寧に折り畳み、鞆の中へ入れる。

カセットテープをレコーダーにセットし、録音ボタンを押す。

鳥たちの囀り。遠くから子供達のはしゃぐ声が聞こえてくる。

飯塚、静かに目を閉じ、ふーっと鼻から息を吐く。色々なものを吐き出すように。

凧の声「おとうさーん」

飯塚凧(23)、駆けてくる。

飯塚「おお。凧」

凧を抱き上げる飯塚。

飯塚「一人で来たのかい？」

凧「おかあしやんと」

凧、振り返る。飯塚も凧と同じ方向を見る。

飯塚恭子(30)が手を振りながら近づいてくる。

飯塚「一人で歩いてえらいな。えらいな凧」

諸星の声「凧さん。凧さん」

○レコード会社・スタジオ内

T・「2020年 都内のレコード会社会議室」

飯塚凧(31)、テーブルの上で頬杖をつき、溜息。

【凧は、ミュージシャンを目指してバンドを組んでいた。インディーズでデビューするも鳴かず飛ばず。知り合いのレコード会社の社員に紹介され、25歳で契約社員として入社。数々の売れるミュージシャンを発掘する【耳】をもっており、29歳で正社員。そして会社のエースディレクターまで成長した】

傍に立つ諸星(24)

諸星「凧さんってば」

凧「うるさいんな。なんだよ」

諸星「とりあえず、誰か決めないと」

テーブルの上には、若い女性の履歴書が所狭しと並んでいる。

諸星「創立50周年のオーディションで、誰も見つかりませんでしたじゃ、カッコつかないじゃないっすか。あ、凧さん。この子なんて良いじゃないっすか」

凧「顔で選ぶな」

諸星「でも、選ばんと上にキレられますよ」

凧「才能ってのはね、出会いなのよ。ある日、雷に当たったみたいビリビリってね」

諸星「意味わかんないっす」

凧「死ね」

諸星「どの子も、歌がいまいちなんだよなあ」

凜「なんだろ。こう、胸がきゅーつとなるような歌声が欲しい」

諸星「ねえ」

凜のスマホに電話。液晶画面には、【下平部長】の文字。凜、電話に出る。

凜「おはようございます」

下平の声「いた？」

凜「ゼロです」

下平、電話の向こうで溜息。

凜「探しますよ」

下平の声「どうやって？」

凜「とりあえず、ライブハウス回ります」

下平の声「何十年前のやり方だよ」

凜「足で探します」

下平の声「まあ、任せるよ」

電話が切れる。凜、スマホをテーブルの上に投げる。

諸星「もう、足で探す時代じゃないですって」

凜「ミュージシャン志望が、みんなSNSやってるなんて思う方がどうかしてるでしょ」

諸星「やらないヤツいないでしょう」

凜「不器用な才能もいるはず」

諸星「また休みなくなっちゃうじゃないっすか」

凜「休むよ。今週の土日は」

諸星「え？マジっすか」

また凜の電話が鳴る。液晶画面に【母】凜、電話に出ようとしな

諸星「あれ？いいんすか？」

凜「いいよ。ほっとけば」

諸星「部長じゃないんすか」

凜「身内。母親。このクソ忙しい時に」

諸星「じゃあ絶対出ないとダメっしょ」

凜「え？」

諸星「いや、電話。出ないと」

凜「ウソ。そんなキャラ？」

諸星「ほら、早く早く」

凜、溜息をつき、電話に出る。

凜「何？」

電話の向こうから飯塚恭子(59)の声。

恭子の声「何じゃないのよ。今度の土曜、ちゃんと帰ってくんでしょうね」

凜「わーってるって」

恭子の声「ほんとに休みとったの？」

凜「とったよ」

恭子の声「これまで、さんざん、裏切られてきたからね。アンタには」

凜「うっさいな」

恭子の声「お父さんには、さんざん可愛がってもらったでしょうが」
凜「わかってるって」

恭子の声「あなたの音楽の才能も、お父さん譲りなのよ」
凜「はいはい」

恭子の声「絶対、帰ってくるのよ」

電話が切られる。

凜、溜息をつく。

○恭子の家の周囲

都下。国道の脇に畑が連なり、野菜が鈴なりに実をつけている。

○恭子の家

広い庭の一軒家。

○同・仏間

飯塚の七回忌をしている。

恭子や列席者は喪服こそ着ていないが黒を基調とした落ち着いた服。
凜だけロックミュージシャン風の派手な服。

○同・玄関

長机を出して、食事中。

恭子「ほんと、常識がない」

列席者の女性たちが苦笑する中、凜は居心地悪そうにグラスに入ってビールに口を
つける。

恭子「ほんと、育て方失敗したわ」

列席者の女性「もう、いいじゃないの恭子ちゃん」

恭子「よくないわよ。全然よくない」

凜、立ちあがる。

恭子「どこ行くの」

凜、何も言わず部屋を出ていく。

○同・廊下

凜、回廊を歩いていく。庭に色づく花々。

○同・2階につづく階段

凜、上がっていく。

○同・章の部屋

凜、入っていく。

簡素な室内。テーブルの上に聖書（飯塚が輝子との面会で使っていたものと同じ）
備え付けの棚に並ぶカセットテープ。背表紙には、日付と鳥の名前が書かれている。
部屋の棚という棚に並んでいる。

凛「やっぱ、引くわぁ」

凛、戸棚を開ける。そこにもカセットテープが並んでいる。

凛「よくわからん趣味だなぁ」

凛、そのうちの一つを取り出そうとすると棚が崩れてカセットテープの雪崩れ。

凛「うわぁぁ」

凛の周りにカセットテープの山。そのうちの一つだけ、タイトルが何も書かれてい
ないものがある。

凛「なんだ。コレ」

凛、そのカセットテープを取り、ラジカセに入れ、再生ボタンを押す。

じーっとテープの巻く音がする。

凛「何も入ってないか」

凛、テープのストッポボタンを押そうとした時、歌声（アカペラ）。

輝子の歌声である。

凛、目を見開く。

○渋谷のスクランブル交差点（夜）

T・「2022年 渋谷スクランブル交差点」

たくさんの若者がセンター街の大型ビジョンを見ている。

大型ビジョンのカウントダウンに合わせて、彼らもカウントダウン。

若者たち「5, 4, 3, 2, 1」

ビジョンに映る2Dキャラクター。若い女性の姿である。（輝子とは真逆の明るく爽
やかな女性）

若者たち「リリー」

口々にリリーと叫ぶ。

中には、泣いている女性もいる。

ピアノのイントロがはじまり、キャラクター（リリー）が歌いだす。

その声は、輝子の歌声と同じ。

スクランブル交差点の信号が青に変わる。

若者たち、岩のように動かさず聞き入っている。

通行人たちも足を止め、大型ビジョンを見上げる。

○裁判所・全景

【敗訴】の紙を持ってかけてくる若い男性。

○同・法廷内

中田さくら（35）、原告の席で茫然と座っている。胸に抱えている裕子の遺影。
さくらと裕子は、まるで同一人物のようにそっくり。

【さくらは、死刑が執行される前に病没した輝子を、国の責任だと裁判を起こしていた。さくらは母親の裕子の過去を知らされていない。病気がちで、伯母の宮子に預けられて育てられたことになっている。さくらは、母親の裕子をとっても綺麗な存在として植え付けられており、信じていた。ただ、週刊誌などでちらほらと裕子の過去を書く記事が現れ、宮子や祖父母は否定し、かつ、裁判を起こしてメディアの前に出ている自分自身を演出するため、心のどこかで疑義を抱きつつ、さくらは国と闘ってきた】

○同・裁判所の前の通り

さくら、裕子の遺影を固く抱きしめ、たくさんのマスコミに囲まれている。

マスコミA「最高裁で敗訴となりました。今のお気持ちは」

さくら「納得してません。あの女の病死は、国の責任以外の何物でもありません」
マスコミB「民事で争うおつもりはありますか」

さくら、裕子の遺影を抱え、

さくら「母は、あの女に殺されたんですよ。あの女に」
通りに停まる一台のワンボックスカー。

○ワンボックスカーの車内・後部座席

車、走行中。

さくらの隣に座る中田宮子 (62)。

さくら、裕子の遺影を抱えたまま大きな溜息。

宮子「お疲れさま」

さくら「伯母さん」

宮子「なーに？」

さくら「とりあえず寝たい」

宮子「うん」

さくら「リリーの歌、聞かせて」

宮子「うん」

宮子、スマホでリリーの歌をかける。

リリーの歌声を聞くさくら。その目から流れる涙。

さくら「なんて素敵な声なんだろう」

宮子「そうね…うん」

宮子、さくらの横顔を見ている。

【宮子は、中学の終わりごろから不良の仲間入りをし、家出を繰り返してきた裕子と両親の諍いを思い出していた。宮子は、それまで優等生だった裕子がどうして道を踏み外したのか、そして高校を中退して家を飛び出した時のこと、赤ん坊のさくらを連れて突然帰ってきたかと思うと、宮子に赤ん坊を渡して飛び出していったこと。さくらの夜泣きがひどくて、なんで自分がこんな思いをしなくちゃいけないのかと、何度かさくらの首を締めて殺そうとしたことなどを、走馬灯のように思い出していた。】

○(回想) 高円寺のスナック

輝子、ギターを片手に歌っている。

カウンターの奥隅で、酔ってとろんとした目で輝子を見つめている裕子。
さくらの声「どんな人なんだろう」

○元の車内

宮子のスマホにニュース速報の通知。【敗訴 死刑囚の病死は国の責任ではない】

宮子、通知をクリック。大写真になる輝子の写真。

宮子「え？」

さくら「リリーの声の人って」

宮子「きつと素敵な人だよ」

さくら「母さんにも聞かせてあげたかった」

宮子「そうね。うん。聞かせたかった」

宮子、逃げるように窓の外に視線を送る。

下平の声「隠そう」

○レコード会社・喫煙室

飯塚凜(33)と並んでタバコを吸う下平勝(43)

凜の手には、あのカセットテープ。

凜「いいんですか？誰か調べなくて」

下平「そっちの方が、ミステリアスだろ」

凜「まあ、確かに」

下平「とにかく、おまえの父ちゃんのおかげだよ凜」

凜「でも、どうしてこんな才能があるのに世に出てこなかったんだろう」

下平「それはな…」

諸星、入ってくる。

諸星「部長。わ、煙草くさ」

下平「当たり前だろ。喫煙室なんだから」

諸星「また役員から、連絡きましたよ。誰なんだって」

下平「黙殺しろ」

諸星「ボーカロイドにするの苦労したんですからね。カセットテープなんて、見たことも
なかったんすよ」

下平「おまえには感謝してるって」

諸星「ま、下請けに流したんすけど」

凜「そこから漏れたりしないですかね？」

下平「守秘義務の契約を結んである」

凜「そりやそりやすよね」

恭子の声「何やってんの」

○章の部屋(回想)

恭子、ドアを開いて入ってくる。凜、思わずカセットの電源消す。

恭子、散らかったカセットテープを見て、

恭子「ちよっと。散らかさないでよ」

恭子、凜を見て、

恭子「あれ、アンタ、何泣いてんの」

凜、自分の頬に触れる。涙が指先に当たる。

凜「うっさいな」

凜、涙を拭くと立ち上がる。

恭子「お父さんは、ほんとに立派な方だったわよね」

カセットテープの並ぶ棚とは反対側の壁には、たくさんの賞状。日本語だけ

じゃなく、海外からのものも。

恭子「ローマ法王からも表彰されたんだからね」

恭子、賞状を愛でるように見ている。

恭子「でも一つだけ理解できなかった：死刑囚のところに行くこと」

凜「またその話？」

恭子「母さん。そのせいで、よく近所の人からかわれたんだからね」

凜「私だって、学校でからかわれたよ」

凜、ラジカセを見る。

恭子「何度、お父さんに頼んでもダメだった」

凜「母さん。一個、テープ借りてもいい」

恭子「いいけど返してよ」

凜「聞くの？」

恭子「聞くわけじゃないでしょ。鳥が鳴いてるだけなんだから」

凜「ナンダそりゃ」

恭子「部屋の一部分なのよ。何一つ欠けちゃダメなの。わかった？わかったの？」

凜「いちいち声がでかいな」

凜、ラジカセからカセットテープを取り出す。

恭子、部屋を出ていく。

恭子「あと、ちゃんと片付けてから来てよ」

凜「わかってるよ」

凜、テープを見る。

○元の喫煙所

下平「おい」

下平、凜の前で、掌をひらひらさせる。

凜「え？なんスか？」

下平「会議だよ。行くぞ」

凜と下平、煙草を消し喫煙室の外へ。入口で鼻をおさえている諸星。

諸星「こんな部屋、なくなっちゃえばいいのに」

下平と凜、次々とすれ違い様、諸星の頭をはたく。

諸星「行って」

諸星、二人の後をついていく。

○レコード会社の廊下

凜、カセットテープをポケットの中に入れる。

○車内

さくら、目を閉じてリリーの歌声を聞いている。